

弥生

〔やよい〕令和7年3月

弥は「いよいよ」「ますます」という意味で、「たくさんの植物が生まれて花盛りになる」という意味があります。

発行：北海道神社庁一區教化委員会

人は巧にして偽らんよりは、

拙うしても誠あるに如かず

― 曾我物語 ―

今月のことば

人は巧にして偽らんよりは、

拙うしても誠あるに如かず

― 曾我物語 ―

世の中は誤魔化して渡ってはならぬ。ゴマ化しは必ずばれる。昔は人生五十年といったが今日では人生は七十年である。

この長い人生で、一日逃れのゴマ化しで、人生が渡れるであらうか。神道を志す者に、このやうな者があるとは思はれない。しかし商売の道に長けてゐる人のうちには、このやうな者のあることは否定できない。

「巧に偽る」とは、口達者で口でゴマ化することである。それは長くつづく訳がない以上、人生は口は下手でも、誠の心を持って、つき合ふ以外にない。

ありのままの姿（言行）で、世を送るのが、一番人から信用される基だと知っておきたい。

（神道百言 一般財団法人神道文化会編より抜）

季節のまつり

上巳

三月三日

桃の節供「ひな祭り」

上巳の節供、一般的には「桃の節供」として親しまれているひな祭りですが、もともとは田植えの前に田の神様を迎えるために、紙や土で小さな人の形を作り、体をなでてけがれを落とし、川や海に流す祓の行事であったようで、その人形が次第に豪華になり現在のようになひな祭りが行われるようになりました。この日、女兒の成長を祝い喜び、末長い幸福を祈ります。ところで、俗に雛人形はあまり長く飾ると女の子の婚期が遅れると考えられ、ひな祭りが過ぎた翌日以降、なるべく早く片付けるべきといわれています。

春分

三月二十日

「我が家の守り神」に感謝の祭り

この日を中日に前後三日の間をお彼岸と呼びます。ふだんは忙しくてなかなか行けないお墓にも、家族そろってお参りしご先祖のお祭りをしますが、これはわが国の伝統的な祖先を敬い大切にする信仰に由来しています。

社日

三月二十日

「戌の日」に豊作祈願

社日は、産土神（生まれた土地の守護神）を祀る日で、春分・秋分の日に最も近い戌の日をいいます。「戌」という文字には「土」という意味があります。この日、土地の神を祀って春は五穀の豊作を祈願し、秋には実りの収穫に感謝します。

春彼岸について

わが国に、一年中で祖霊を祭る共通の大きな機会が四回ある。正月、春彼岸、盆、秋彼岸がこれである。このうち彼岸は春分と秋分の前後三日ずつ、計七日間を指して言う言葉で、暦日としては陰暦によっている。彼岸の文字は仏語から出ているが、春の農耕等に着手するための前提として祖霊を祭ることは、やはりわが国の固有信仰の習俗から出ているといつてよい。これを、言葉が外来語で、行事の形式も仏の供養に似ているから仏教独特のものと思うのは誤りではないかと思われ。これは仏教が伝来してから民間に普及するまでの長い間に、わが国の祖霊祭祀の習俗を多く採り入れたためであって、元来は祖霊祭祀という日本民族の固有信仰によるものであった。

彼岸が祖先を大切に考へての祭りであることは、物故した祖霊にばかりではなく、生きてゐる祖先たる親に対して行われることでも分かる。愛媛県の一部に「彼岸養い」といって、親に供膳することが行われている。このように子が親に対して供膳して孝養をつくすことや、嫁が御馳走をつくって里親の許に持参する例も多い。これはまさに、盆の生御霊（いきみたま）供養といわれることと全く同じことが、彼岸にも行われていることを示している。

彼岸行事は、子孫たるわれわれが今生きていることは両親あつてのことであり、さらに祖先あつてのことであることを忘れぬ限り続けられて行くであろう。祖霊祭なくして彼岸は成り立たない。祖霊に報恩の誠心を捧げつつ、生きるための営みを、わが民族は悠遠の昔から続けて来たのである。

げんせいりゅうせい 源清流清

根本が正しければ結果もよい。
川の流れは水源が清く澄んでいれば、自然に流れも清らかであるということ。

桃



参考文献
『くらしと祭り百話』小野迪夫（神社新報社）

日	月	火	水	木	金	土
						1 先負 み
2 仏滅 一粒万倍日 うま	3 大安 ひなまつり ひつじ	4 赤口 さる	5 先勝 啓蟄 一粒万倍日 とり	6 友引 いぬ	7 先負 る	8 仏滅 ね
9 大安 うし	10 赤口 一粒万倍日 三りんぼう とら	11 先勝 う	12 友引 たつ	13 先負 み	14 仏滅 うま	15 大安 ひつじ
16 赤口 さる	17 先勝 彼岸入り 一粒万倍日 とり	18 友引 いぬ	19 先負 る	20 仏滅 春分の日 春分 社日 ね	21 大安 うし	22 赤口 一粒万倍日 三りんぼう とら
23 先勝 彼岸明け う	24 友引 たつ	25 先負 み	26 仏滅 うま	27 大安 ひつじ	28 赤口 さる	29 先負 一粒万倍日 とり
30 仏滅 いぬ	31 大安 る					

二十四節気

【啓蟄 けいちつ】… 五日
旧暦二月卯の月の正節で、このころになると、冬眠していた地中の虫も、そろそろ穴を啓（ひら）いては出しってきます。

【春分 しゅんぶん】… 二十日
旧暦二月卯の月の中旬で、この日を春の彼岸の中日といい、国民の祝日になっています。太陽の中心が春分点に達し、太陽黄経零度になり、昼と夜の長さがほぼ等しくなり、この日を境に昼が徐々に長くなり、夜が短くなっていきます。

六曜・選日

《八曜》
【先勝】… 諸事急ぐことによし、午後よりわるし
【友引】… 朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む
【先負】… 諸事静かなることによし、午後大吉
【仏滅】… 万事凶、思えば長びくおそれあり
【大安】… 何事をするのにも吉の日、大吉日
【赤口】… 諸事油断すべからず、正午のみ吉
《選日の吉凶》
【三りんぼう】… 三隣亡日、普請始め、棟上大吉日
【一粒万倍日】… 出資・投資・購入、新規事業開始
婚姻は吉、借りる、離別は凶

七十二候《3月》
春 分
初候… 雀始巢（すずめはじめてすく）
次候… 桜始開（さくらのはじめてひらく）
末候… 雷乃发声（かみなりこえをはつす）
春のかみなりが鳴り始める
啓 蟄
初候… 蟄虫啓戸（ちっちゅうこをひらく）
次候… 桃始笑（ももはじめてわらう）
末候… 菜虫化蝶（なむしちようとなる）
青虫が羽化して紋白蝶になる

※七十二候とは二十四節気の各節気をさらに3つの候に細分し、一年を七十二に分けたものをいいます。季節の移ろいを気象や動植物の成長・行動などに託して表現したものです。

「君が代」に込められた先人の願い
君が代は 千代に八千代に
さざれ石の 巖となりて
苔のむすまで

国歌「君が代」は、『古今和歌集』の賀歌の中で一番にある歌が、初出だといわれています。平安時代に歌われていた「君が代」は、鎌倉時代以降になって神事や宴席の最後に歌われる祝歌として一般に広がり、江戸時代に至ると物語、伽草子などの文芸、浄瑠璃、謡曲など芸術にも登場するようになります。「君が代」は朝廷から武士、農民、町人を問わず、また江戸、京都などの都市から南海の離島に至るまで歌われました。千年以上も人々に親しまれ、祝賀の歌として使われてきました。明治の時代となり国歌の制定に際して、「君が代」が選定されたのは当然のことでした。日本の伝統として「君」と「国民」は分け隔てなく、「皇位の降昌」はすなわち「国の繁栄」であり、かつ「国民の幸福」であるということが「君が代」の歌に込められているのです。それは、日本国民共通の願いの表現でした。

この国民共通の願いは、日本国憲法第一条に「日本国と日本国民統合の象徴」として天皇が定められているのです。

安産祈願 3月の戌の日
6 日 (木)
18 日 (火)
30 日 (日)
*戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。

《20日 春分の日》
自然をたたえ生き物をいつくしむ日です。
祝祭日には国旗を掲げましょう